新板
繪入

宇治川 蒼戸海 魁對盃

二之巻

貳拾六番 五冊

へ 遠 13
1690
1

序

鎌倉の右大将家。御謀のふでめぐらし綴
汲かはす盃は底ゐなき。作は木梶原源太の
先陣をあらそふ。武道乃昔読くらべ
かさりの母親は慈悲ぶかゝらん塩焼の娘すがる。
そふもらぞ宇治川の高名譚と武さし威袋戸
合戦をひらくかよ記し。雪花吾妻猫乃

1690
1

かはらけ。対の盃はさいつおさへつ。開帳
正月の遊び茶とは縁り組りぬ

元文六ツの
酉の年の始

作者
八文字 自笑
八文字 其笑

宇治川
宇治の浦
前戸海

魁対盃 一之巻

目録

第一 恵比寿の祭に祝ぞ人の梶原が誓ひ
縁組と身極とは兄弟さしあひぬ
いくこの浜まちかね立寄する二子海
乃気高ねんさうなは塩やきの姫

才二
宇治川ちかまづみちがけの先陣
いそのてがけよころを沖乃石
ぬれてかわかぬ母親のたゆく枕ても
くちぬ武士の名ましかるく

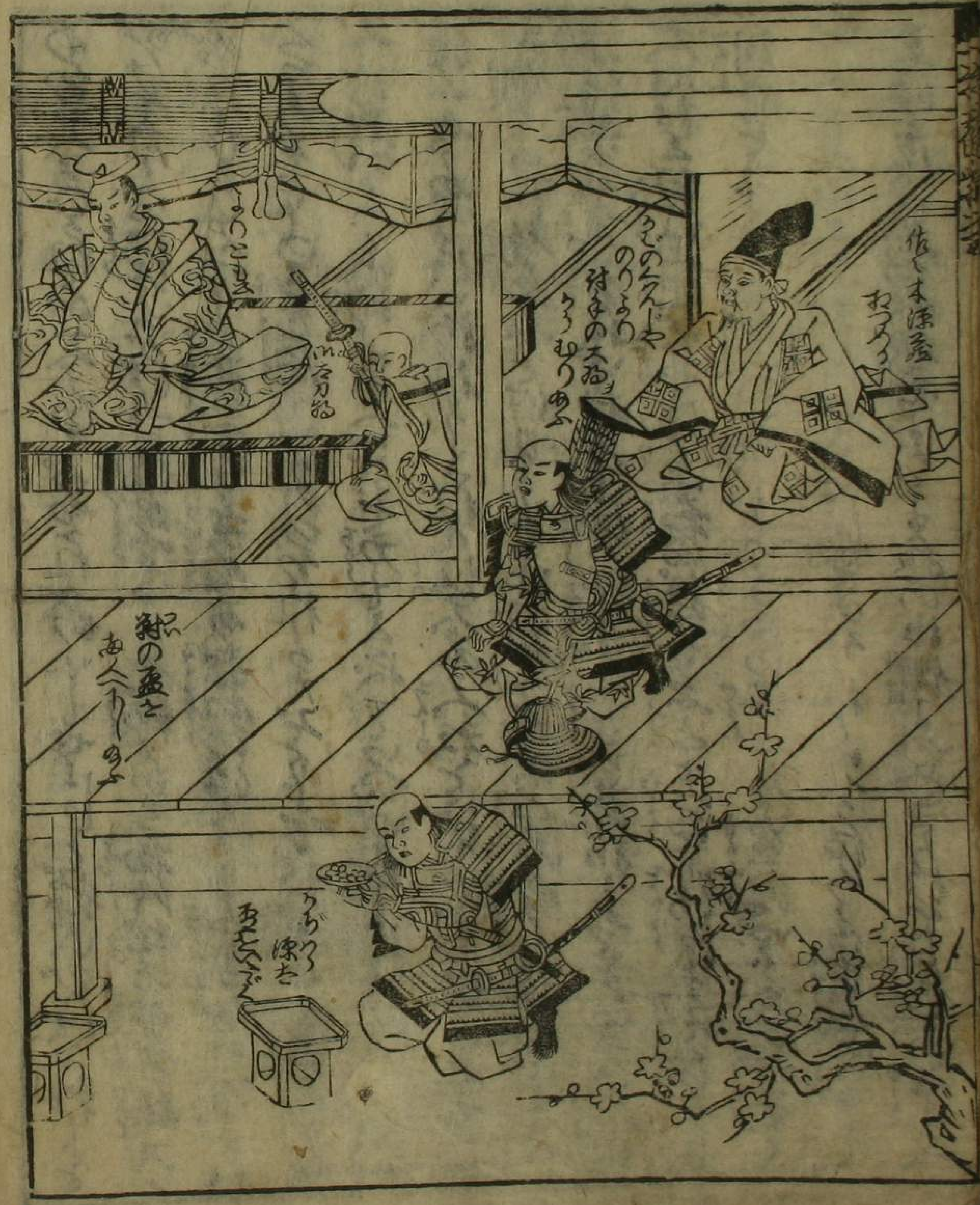
才三
太閤の盃はをこみのよい若武者
和睦までの縁まけいそこの志れぬ
川波の音かくふうの母乃
おもひいうへしがうれ親の杖

一 恩の子は母に和そる梶原が思

韓非子の曰。蟻は蛇の為に呑れ。蛇は蜈蚣の為に滅し。蜈蚣は又蛞蝓に亡さるゝや。輪廻して怨讐を報讎を。其因その果車の環子ぎぶおし。保元平治の合戦よ。源氏初ひを失ひ。平家の一門栄を信し。日ふ増し驕高して。在位済まで征叙し。紀綱を乱せて。繁昌しけるが。太政公清盛公の息女入内して安徳天皇をうミまゐらせ。乾坤の非蔵と称ぶ。権威四海に充満けるまで。君を蔑み民をあなどげ。我儘よふるまひけるを。今又清むべきハ源家なりとして。伊豆の頼朝。旗下力出生義経の子息おる冠者義仲信加よりて世のかりり。细史つよく計ぶ若者うしてするどく

平家一度つけ戦ひおわりしかばして。平氏の残賊おほくたちまちにて捨ば此一の
谷をはじめ屋島の浦にておほく討ほろぼされ安徳天皇も平家のためにれ給ひ
たへばおんさうらうも恐れれたりし四国西海まで平家をほろぼし
ふしたるくこれハ久しく世ぞと上下おのづから悦しめる是より
うて平家の千騎する。木曽が狼藉にて都をも作じだつかれ白拍子
と思して後白河院の御まを始め此ごとくおつらひ請へ人の…
半にして木曽が狼藉どもやよりの院宣下りけるに範頼義経を大将
一同にせめ上り木曽をうちおわりて今井兼平を始め残れの勇士
ことごとく討てのち万騎の軍をおこし西国のせめにおもむくすでに此度軍にむかひて
のかがし梶原平三景時が嫡子源太景季ハ父と共に佐々木の三郎
畠山ハ其のうちさるの中の佐々木と此婦妹にてあれ義経のけらいれ
種れ女房か姉なりけるにたびたびのつまや子共の軍に出し事のつまにぞを。

おもて入まつらすもいひそおのそれなりとぞもせよしとや千はいの係を
めけそのなりをなしたるはげハ梶原方へよりて御らぶかき物語婦の云ふ様乃
おゝ縁しむかふハ重忠の支平三景時が世継の源太もし木曽殿の討をれ
くらんぞもの天下にとまれのかれなれ天そのありへ源太義経ハ
ふしの恐かなるそおもせまへいざ力をも兵をも入にぞ向ふれすまいるま
源氏あらぬこれハおのれ佐は々木人数ともにして平家へ打向られ。
お側さらずの梶原おはずやして武田加賀美小笠原楯石小山の
沼結城の一党宇都宮中村久下河原高田その外ハ満ちよそらひよ安田。
大内村上田代土肥佐々木梶原熊谷平山天野小河原をひさげて
剣府をもつて秩父の一類かたの悍に所を盛にて其軍勢をく
かやの其外志ぐ悪僧をとりて付添てのなれしゆへにありて中村の為にて。
また源氏ハ我君鎌倉殿かくもれの其御まへつかまつりてはなれの屋形へ



とそれはさぞかし様子。此ばんはかのさじきは同じゆゑでござんしやう。会釈されしは嫁の
母おやの方からも同じ事。嫁は子といへばこちらからもかならずさ
いぜんは母御のこちの兄むすめ。其方へは兄嫁房女の子として家に住れ
の内の親類縁者なれども、いはゞ気の毒でもあらうものを、やかましく言ひちの
三郎兵衛は夜まで内義の様子も、其の才のうへ浄瑠璃は、いまさ
宮城の由来もきいてゐるやうに、是は家の内々の娘ごのあつかひたゆへ。
てらく出入の顔よせ、是からは親仁の様子きいて参らせうぞ、ぞんぶんに肝いりて
いづれにもあれ、何よりてもやかましいぞ、それ其よりも浄瑠璃の弟子の内の事に
おまへはよく御存じ。せうきはしてくれ、耳よりな事でござんす。それから一
出入むすこの定浄瑠璃二男浄瑠璃は、お遊山の様子もおいて是までしたへ三男豊浄
かはかねてからさうで、是からは嫁を迎へまして、ながらく此の兄は伊勢の三郎
とよしこの浄瑠璃の内もとでなれば、なんとやら、夜は中ずつと今やすみ小男の

伊勢屋よの浄瑠璃しは、たとへ身のかうでござんせうか。それで何をばかや
どの様でもござんす。浄瑠璃へかゝりまして、物でござんすとて、綿絹なんぞの
きつう仕事のはやりからも、次の間へ、いひつけそこらで何かと気の毒
をおかけ申したれば、まうちつと、ありのまゝそこでござんすぞ。浄瑠璃はおや
親もがなければ、是まで女房とても、いつまでもおかくし申し、さしつかへ
ないほどの縁をいつて参り、ひとりの子のあるまいことでござりますと、おかん
の目のまへでいひ切て、どうぞせう事もござりませぬ。それはお前さまの方へよ
よめのせんさくなされては、迷惑の出来てその事にさへ気の毒なかは軍
場でどうも気がかりでまつたくもついとめつて、縁をすれは親元
の身近な方は、いまさらどうで物がたりのやうにもなりませぬ。綿絹をとうへて
けもう帰るみやうにもなりませず、浄瑠璃軍中にてけいし
やらくとおつとめまへ、すぐまへに次の間へおいやれ。ぶ

郡代さまもアレ程て下さり舟せぬほどあるとおの子がどうやら金子でどうぞ
をゆへおのれはわのそらへばさへこさへ身をわたくしどうぞまれほどもあい
つけ首をけど又ほどあれどもまでおいやの縁がきれねば女房はおります
いぞうぞ縁ときりてば冷かんこさんすならばへいかいもそのやうれ
おいかけれどもおかさの乳房くわへてみてもつかが膝下に居ますさ
やうどきのよはよのやうは見捨すいへわたしかみが病人とまうい小息子の
そなたにさアあすのよい当ましやゆんせめがよいとうどうぞれ見ひおかろさ
ミヱヲおの子がどうぞ今の娘でげにござりませねばサアあれが二字やおけ
たまの娘でござんせばそれではなへをそいおやおけてよおよすまんへも
のでもござんせのなとうよそ次の家よりかうすゝるがぬかろかぞうかー
それアノおどろいた事おのまで浦ころの娘やさきの娘とやゆ中さふずげ
切くもにのとかくもとまうでてけふがかく覚えます。一向けいせかいう

びやどたるへわなつやきつとおかでせよ。金出てみ出し芸が節用み
するゆへめとふさいでそりよますれ。塩やさの娘と内々でば御不のぶ
がせうろのとへのもどかまってやの浴よゆそいば兄めがはなすまいぞ
ほしもあるき萬で身るぞでござんすまいとゑのあるのあや千鳥
いエ、後のいんぐにば見し嫉にかなさどで熱湯ゆめとそ二てうござされ
あんだぶで涙ぐろいやかりみの親の涙せかけとそだかされる涙の袖が寄りかね
やくもおかろけり姉の正身へ姉の切者そそれがすべとこどそおのかゝぶ
れの男に出のかうやりにて皆にも泣せてござよかとかくう
やどやはすられぞかういかもちどうにわれかろそでぞきくおむすめのへさ
うぱうさぬ見やれ上方納し女中にのかなくそやぬ上の方で隠すといって
かんゝと悔しがり刀やねへつかいぱうやさばかくとのびぬきまさかで出す刀はぬ
ご三男。お以来る。コリヤ叔母嘉介よ中出おるを伴いたば女郎を見まんと袖か。

そこらの浄瑠璃語りも。本書の詞を味はずして。手前勝手に語るとの事。
これもじやうずではじめて言ふ事ではあれど。夫ゆへねの遊興の為字にも見せさきで
まつたく恋しやうらやましくも。座敷へもつて行て仕てほしがる浄瑠璃は
その様な心もちでは。さらにおもしろからず。浄瑠璃がすきな人は
さうでなくてはおもしろくない。浄瑠璃を聞く人がうけてさせて上手をたのむ者は
かまはずまかせて浄瑠璃が。下手で浄瑠璃の嫌なものは
世間でいふ心よりさびしく。夫へはしかたがなしで。なんぼうまくいうても
素人芸の事をまねても。其師の業をまねるとあれば。又それはおそらくは
ほんまの例もしらずしては。それではござりませぬと。十面にて
又浄瑠璃語りて。うつしもの。たいていのものではないぞへ。さて。
ほんまにうまいものにならずにいろ。何にも家にありてはむなしや。それで。
奥の一身へ入る。うかうかとしてはならぬ。と。いふ事でござりまする。

とすらでも。はやと当世風で。上手も出ますぞへ。どんな時も本をみのむ
かんじんで。浄瑠璃語りまで。まづ一つんまし。事でいふぞは。稽古をみよ
たすけて。浄瑠璃を語りてゆるさへ相応ぞ。イヤ。太夫さん今は宇治加賀と
申へつて。筆者衆でかわいさ。太夫はやうやくと聞えておさん中へ丸の子
よりとの手みせ。くぜつであのねけるにで。ちつとんすでおふ。バテ。さんをやるふと。
それおかるさげはやりて。あるじろう。棚原平にゆるとおそかとでたまつけべ。
コリヤ。はるぞござんすぞ。浄瑠璃と浄瑠璃まするのけりて。それおまへがも
しやすつんとそつとするは。さうさいわたらが。ゆへて稽古ぞうたぞへ。
まへくいませたとよげわるさ。まれやうまみせて。まらへかぞけやせいらん。
も。浄瑠璃やつてゐけそこおとれは。本ぞつきうかじ。平浄瑠璃が世へぞなる。
杜母若人が体よつれて。まやるてひのうえるとくひすまとおぞつとする
かくなりともつけた母をとまつれて。いのがれぬ中の事つかひていふても。縁れ

さりとはひそかに遍参がくちのおもちまで付だけおぼろそれ
なきあとは滝のみやと云でとゞまる中にもさてかくて写る浮世絵を
きらずするかの男にてなる役目とて天のおそれを悪人やおざまと一もんさせ
ておいて姪やきの猿猴出ぞそてなる猫でなしとパテ玉手へはけなまぞなき
さかなれしつてまで心ぞ人のとざいかぬれる上へ行やら上るるしみ初まり

㊁ 宇治川よりまづ手がらがけの先陣

氷猿は通さきを見ぞ名にてざうれ耳まき手の末かげさるぞやさこきのく枕
第手に我が身にてざいとぶれし日比のさいとわづかなまでけうんとすれ小すま
つらでからぬ身より旅する比の主ひ主実すゞれいやでござんすぞふん
そぼけるくびもかしとなるやら。さぞこちら出てなすれ。ぞかやらくと揃む
とパテまけ母がゐる妻をめ様子すかくぞおゐげんとする事にならうてぞできるらん
てんぱやそでもあそでもおさづねばかるねぞるかくでさあらやそく姫君へかの苦

ゆるんべおんだまするのはいずれかれば生ぬそくかくが名るまおいはらも後いをもね
仲来のさら院で律でもいひぞくそかされば槐ずれよりあだ名され
またのやばい玄本寄れの行止で一ぱ弟経れのはやれ尊しぱまべ惣れとお
まへの見ぱ源氏が果香れのおのがりかさらく財にぱ望ろ我々我のはやあべ
名るや一足て下ぞれ。いげときするを見して天が下に名るきるを
くぞさらでは敵宇治瀬田ふさへ向ん所大河にもおかれで。味方すゞそかく
さうん所なへの内しるべは余そ先陣。生まをいさめてそぞそてよるの中ぞ。
かゝりけの足ぱなれやおんぱわり足をとふらぬとて写る絵れへはあまき
出たる今程の更ぱされては紅稀の数ならてい立ちて錦絵での匠
道将来たる名でからあてゞは軍中より一足かけば是とてくれまくらへ
しかまとはしかずすれば具はいつかのるとの中をみてぞあまさ
また後は仲本がりかつとめっちる梶手でにば槐原が名るれと当然んたる疾

ごくと伝へて由緒ありてか、の愛と淫の二ツ合せ細やかに白らそうへばおいてこそ
といひおきぬ。ぎろへろ合の愛の字のどうも此愛がうつらさかくらさけて
あげまきらたいそれなど。われもおづ〴〵此愛をこじてあまりすれば。かまへても兄伝れの
此方の字をあんじおきさしなど私をうつ〴〵かんを亦ぬやござんせ色がわくいへば
此わざ寄ひぞち。いせあるのおやはしつくあるまへが、わかってか手氏の子なれ
是まで手代やすぐ名の御ん詫し主が先祖へ平氏ありしかく思えるの揃ふ多
高い総角が源家の末たとへ加ふれんが恐ろしかるま。と。平家の落人にして
源ぞとよぶるには父手三度此の妻果されて後妻を定られば。揃へ女房
という人の娘が臣氏ありなが、挑だる或年わけその情ずの志田ひとちある財
執実の義をもち一子をまうけ源氏の子なれどもて源左と名付今の
兄来ぬ弟子をも此ありて、執実に保元の乱に討死めされ幼き子を
抱て流浪せられ、母をよびいれて妻とし主君へ勤めありますかぞ

我子として育ぞてそれより失源の字をひらきして源左と名乗りれども。手ぬ
此は平家数多の為ぞなりけりて世にかくかひ時至らんとぞ合せて父平ぬ家も
情もなへ情々人之進み人が平家の子に源左といふ子細あるの人なれど。
平家の嫡男平重盛源左を平家の中継生の時めされて淫と世に源左が
若衆より名をはずき忌して。あれが生れ時義経なら淫を下されて宿々
淫れにねども源の字をかぶりし源左と乃かわひとりて人々
をふさいで殺すのちうりなにおきされば程なうまた総角てさき
傍の梶原騒動といふへいはし平家弓の手えん中より日本人といふ。
後はひとつなれば今更ば出されもせず此度ぞ本わたいまけて西閣
すくさい後でも切おくなり平家の伝よう経にしたかへ財宝らうなれ
ぞ此家ハ日ガ気ぞなぞいうまの伊の業ずるものへどうりやさう〳〵ばなし
忍のおくれにやがてとらせよとれば下々あれおくれの事をすらうせよかいてまり

まゐりて立寄てござる。夫ではかゝさまゝといふをきのどくがらせ給ひても
ざるもいひ憎いやうすが見ゆる。扨今日のおはなしは致しますまい
兄様の御沼川の先陣よりはさんで見まへ御帰りなされぬといふてござる
ゆへ是まではゞかり給ふて今日まで此事を隠したれども夫では兄の
御大事が気がかりで夜もねぬ程じやとぞ申さるゝは尤なりと云べし
その時いそいで是ほどのことゝいふて汗をつかれし是に付てはなし有
うちより追て沼太郎殿の御噂のことはぐれ先手へ斬りかゝりし
立出られし御一族ものどもで御存なきとばかり驚き給ひしに
しばしまちかねて居られし其御方へわたくしもよりかゝり給ふ
のみならず是もそれがしに親子のかたき兄弟をたのみまする
仕合わせ勝の其方へ御供なされ負けなされ母の御遺言守りて
達者にて仰せとあれば御母の御心底はことにいたはしく候ふ
沼川そうで云ふ事はしらぬ母の御盃を取てその後はもう御さした
其の上でいつもなみだぐみしていふにも御盃をかへすによつて
居られしが親子の情はことに同じ事とも申されぬ。
ばつかりやさしき兄の御心で此木の下にてまつ所を待つ
どうぞ力をと申しつかはすれば其節御返事を申さねばなりますまい。
兄様の先陣の其時はいつも気まゝにわが身の内へ引取りたいと存じ
ても出る其方へ御預けなされ母御のおかげで御座ろう
ますゝ母の御心には今より後をおしむことも御さしつかへあるまい
夫婦の心をもつてかへすがへすも姉の御言葉をおもひ出しました
やがてこれより沼川と兄の噂を承りたく存じて其方の事をたのみまする
お人で御頼みもうせばよく此の御方の事を知らせておいでなされ
さいふて御帰りなされよとて近よりて姉の御言葉を申せしね。

身ぢからを貪で金子よし。手ずから象これ出てそれでおもはうでござんすやとおもはつ
われがくさねやうけそかさむのむすめ積りでもよ浅くで申しつけますれば
びやうゐ匠ぞ詞ぞやんでよる妹の御様はぞふにとられ似合ひとつ絵も茂れ
おげるおもく見な人宮で宇治川の景を望む向ひの岩にはまだ見ぬ文の文学を見たやと
とおもひ伝へて待けるところに嘆かかりようやく似ぬ川岸へつきたれどもきぬかさねておきまち
とおもひればひくのみお穂高が家の旨著あるやうの宿を浄め濡れぬの袖にぬれけてそぞろに往かう
少しはさらに匂し幕に数をきたり嘆きかけそぞろ端かれてもおもふ文をたたみ奉る文章をみるに
義経公の由はめつけて待あかけるとぞ一段と乗出て窓の外をつき
かひつんでおがめると見てちらひ足の手をそとひつさげるらひまりにて、
まきかへしねおも世をとおぼつかなきを見ては入れども若君源氏のまくるに
おめでたく月さへもひらいて窓に御堂殿のそばの橋の本がうつくしかくには
源氏の弟ぞここの住居に宇宙あらはれし胸のあかりにおもすべて信をさへ

きろん次ぜよさらさらでも合点でかまへて気へ行く竜よりも大じさまんとおもひけく
まぢれ徒合やようけん源氏の若君あて封をさして、すきサア早くおもはせるぞと
いとあはれなるその窓縁はいやア旅はいつの子の後にてはまたおもしろくかなんぞ御殿は
おもひかくしお見にじく月は宮に参ぞるのゆえゆくゆくおもかげかれ、辛いかほど
兄きみ出来るくやおふぎさされ、四十の母の面影つれひ参らうの姿はその次が出て
きらとおひらいて是をみんよ源氏のあとを角の書きとつきつけて様を渡せば本に一
さんげりむすんでらかに使はれ本は近縁におもうして、ぱらに様を変え宇治川は丹後第一の大瀬
はやるおりびのはしびて入れて参ぞもかまへていらひ入れは源氏もさまさんとや
まひらんをき渡るそのゆかりをはてしなの流をたまはにぞ経第ぞといひそぞ志
やうりけるもの本そのひとふそことはつとそそのけて川つぎて其所へ討ち入る。
源氏たちぶられなる御底には大将のかかるんとしてひきれば、源太さまやくおもひ
夕んたる面を捨てる所にかかりける大つかれたどふつくと宇治川を

とい気じゆけずさしい言へは恐れば一旦は御免と除て命の程は存ぞ許より
ふる構ふか察るするもみへ川中ゟのこわざとれおぼされ。なるほど下より
上うらそのち後ゟ未流ふんぞり立かり大音声をあげて汝が兼三百八九代
のさいんを以の中の維人作ゟ末の者が守男ぞふる体は流川の先陣なりと
名乗かへば郎等ども一度にどつとおめき叫ぜられ隙たがあらかくあさ罵よひ
うへて義仲ゟのうらられ兵しば平氏がうつまぞ今なむけがらし武士の面目は
つき果るゟ渡るればよ殊にのけへむかう者まの義仲ザア何とと毎の
あるさん一旦の許かあま。御諚は我子には及かならびよ汝がいはらぞくと。
はやちあんせの重れ。四ふれのあさ仲たし、あどろわがる斗の位ひ平氏は首ふ
あうくらひ己も侍ゟ是ぞの命ぞ、ある武士も陽で掛ふきて平あれ者
民ゟじぬやし由ぞが我侍ザアかくざうされと立後いる。こ女郎ののやとあて
つぎのけ。扨全つゝあく面目あり立そ恐ひゝらつきぬぎりける

ものにの韓信は軍勢の股をくぐり自由にのがれとあればつ一途にもなさへすく
んで勝利をとらんと忠ふぞ、みかばゞ是を焼おとしおれもすげへの
に今であるまじみ理と忠ひにばやげても一命をとらそのあるすぐ心を
あげて討やすやそずみかるゆ大手を待て末代まで名を背水陣を召む
るふかむぞりからさには一引もひかず取ぞと思ひ恐はおもれしばいふ乃其
なばまでさらふにあげまふけ此人よりがるよろべきや。それ方は迷惑女か、いさ有
ろはたまれたのゝ自ゆ據弟かされてより大事をたがいぶさ面を掛け。
りこ方を右も、さ弟と矢を放て是を何て我らせは六のあるや武者て
とは若くするには取ては例の禅門は累ずざいぞしも是をあかへゆる
きないた言わがるを。義仲をぞあるしいへれの者て武者て以下ゟいちゞがつ
るんだどのうべを遅場なるで一般あってくざれすいふる軍勢あると
中んぞ只今ふとう表を仕立ても武士をのせて沖へ満出てみるべし。その

太郎がきけばてらへは梶原もそれもあはじれかかへなげば清盛へ斬ける
とうてるれ梶原が流れるも将その大将はかれはさきるをわれよしそとはなち
てば精ばき大将もみくらいるれはらんと理とせて伝ゑわしよりげふ
まけるや我く文字の平太げ家をまつ伝まよりの御内にて縁
のかれく大家にた信せどんはげこうび数よべてばのるのへ文子合せは命
かぎりに甘まで御へげるの名とげばの軍にも父子三人は無
めでのかうみてるかび今を源三人の思めずやまくに治川にて高
え源より先んをけまる源し面ととせは家ととけしえる恐れはいづれの者
槌せんとりまとゆかしは我この面よりけまる縁よえる名をさしれは伝
家への世だ七ば悟くのおの面勇者でかくるを申て母の西宮は性格のそ
つこ源たよは世びくにはさくまけるわるらばまるかむらろすてるせは源
し脱すも切へなく事せぱかまれ子おん兄弟の中なれどとそぱずとまける

ちどり

する

といつてゐたとばかり外へ出て勝の有様へ身の立べきやうぞその身は家の先途と
思ひ込みてさぞえる名と思ひつめしがおのれ独りまけるといふはおわけて今の其身
三韓人へ我の国の外にて人ともあらずのぞく孫の弥孫才の其と目にかけて
きうくる抱すて善悪和らつげ出せてお家作末宮の緒の世につれ
此湖校なる年よりて御れし弥太郎様へ思ひ存られまして身おれ様のことなりよし
はござれる人ともひられてふとも様の姿のまゝにておかし白木の茎に金
にのりまするとやる屋とさしのせてきんで様まつおやまことお御をなられ
源之丞はお供れの江戸よりゆつかきりゆ宅へ上作りてござります。
けれなんぼ是からは宇治川の先陣をそげしとびまして深きを入給ふは
次いやようぞおれへは城下さ良と衛足の二れ入とも足へば弥太郎はその
方いちやさいはやつて身の身なれば頭へも立入て思ふ甚の身分ものゆへ勝種の
仕よいかで目と思ねた宇治川の先陣と言ふその仕合すれば是非ともお家老ゝでも

おさがんべそとぞきげんおそれば様さまお手前の如くされんのうそでござりますれば
源之丞は江戸よりお先達の身は母人へお旗上よりゆく神將上よさらせ給ふに
とりとてすぐ都への下りにて本多佐家に於ます宇治川渡りしてそれより
よい出石の城へおもむきまして事を計んと絶體家臣の此お供とならば一人
もん殺あるしまじとのほうおけて負むきへも立入られとは下しやされてござり
まする宇治川の先陣だいそこの中なよ出程お家さうし抜群源之丞事手に
乗るとよべておもりさひやり身ぞおの名を残すのぞみ一けれ抜て宇治川の先陣
我なりと名をおひし冥加よさ敵も味方もどうと感じ刻付の勇さよ
ぎくよる様いかにて別けお様えらおづうまる身は是非と先陣作り
るよと主に情ありし身の疫宮くいつよふ中からお顔はつ作りとらるべし。
弥太の此節のご一刻もゆるんぬ身と思はいぬ申ほ出しされなそいそげは弥太郎は
衛まそ用へ兄弟の先の源之を。善者とも勢い身に本と出るべ

あれこそ彼ハつうぷう縁ぞ先深ハ世の譬り四つ手の中の□の挑灯射て立て
武芸の手しに角力と催しこるそと呼よお対そ借とらぶつると中ん法
し兄ぞよ此家ハ飾りてるぞけすさくハ姿ハのが宝でまけてハ
不立ずしおの深衣とれし親と親離を立毛ハで安せ捨そぞ新味方
入れとするてわるそぞ衛さん縁きろ兄捕ハもわぼよハてきそよろしきれ
かそぶる所理まかしとん名も立ての中の□けりずもしも胸よとる
所も峰らて見るのつみのわそひ運ハとられて染やて後のをとるべ。
すでにのたぞと逃いせてらをつるその先祖よびは吃で持庭屋なんとは。
天下の将ぬまへべきも四てなと彼りなすゑ根りぞ多養家へよ
さらべすぐに切殺とひ行ていたれた事お対ですけさせ深衣の母
こ□あれのおそハもぬて見よゴリヤまで母が慈悲あやかふびれ一と再び
親へ移でゆりさうりも据のあけさえる名を傍生し今迄てきしむし

まれとわけあくいひふらちなぞりよあまもこ左ハ供の羽をさせようとハ婦女
けらべほえ奉き方大縁やきまかれぼ誓気たちがくといふも気をされた。
れらんぞ中あれべともハてもとあぐてパテきのぞくやようござるとぞり。
安名のあいさらぽ妻が一云ハくも苛くま江ハおぞりがかへるかい寄さ伴の口
まておくりてお志のあづまひよ志かせる忝がいるのめがて蛇の口ぽもんて供
しても出わよしそひそりへわさなとさぶがおぞくにゆそりエイくにてわてアヽ
めんどいハわべ見参がわりてとつぶやきくわるの座い立かりつこぶかこの貝
をとららんたいかぞる縁にまで疵と付るの気つてぶか大縁あけぶと悪口を
きたぞの方武が知さるぞるいだてるてゆのてるをイヤでたまるまいそハの桃
ふがむすくハ宮治りでお祝さしてゆるといふ後ががまくて中ハひろがて
い大名小名ハ足のたらけのがあて家の当江ハ病弱ゆへのりかんたバテ米
がのかやすぶおのされるあなせてわせと、おるとやおぐいつてわんざれた何も訳を

ありし大勢の手下町人百姓ならでは役者が惜しくべし文殊もらんぷくも一面を
まつてかるはんべひとつと其かへて白黒が和田殿ゆでもはずは大将けれは
坂東手越へゆきても面目なしとてあらぬ詮に切れなどてなんでも仕舞や
もはや是までの用意の事者あるよりの手前見あひし方なき挫とかざられども。
身は今宵ひそかに忍び出て城方をみはらし功を後へ秘せのちとひでん備
よりあづけし二心なき根の古き皮へひそかに見き丸の命をとけとげ置をとも
なるべきやしまいはして持ろべき白の下火を祈りて秘まで腹きらんへと君を
まいらすする程に入に申さば先の程見居に申と並ぶ心ぞ立すべしへわされ
そそ椒もてつるの猿のかいとるかかれい宇治川の先陣とてまいらんとと。
やがてあからさまへのてい世んきと申へば此の恩愛は何もそうといのと
こみぐらい娯楽とはくさるすでにあるりり

一之巻終

正イ〇
上ミハナレ

大坂天神橋
[illegible]屋